

瀧ヶ本遺跡

2007年

日田市教育委員会

序 文

瀧ヶ本遺跡は日田盆地のほぼ中央に位置します。かつては遺跡が存在しないと思われていた日田盆地の沖積地も、近年の発掘調査件数の増加に伴い、徐々にですが、その様相が明らかになりつつあります。

今回の調査区は宅地造成に伴う狭い調査範囲ではありましたが、縄文時代から古代の溝跡や遺物包含層などが発見され、貴重な成果を取めることができました。

本書が、これからの文化財の保護や地域の歴史の解明、さらには学術研究や学校教育などにご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、調査にご協力いただきました関係者の方々、作業に従事いただきました皆様方に対して、心から厚くお礼を申し上げます。

平成19年3月

日田市教育委員会

教育長 諫 山 康 雄

例 言

1. 本書は、日田市教育委員会が平成17年度に実施した龍ヶ本遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は分譲住宅建設に伴い、有限会社宝珠開発の委託業務として日田市が受託し、日田市教育委員会が事業主体となり実施した。
3. 調査にあたっては、南ランドマップの協力を得た。
4. 調査現場での実測・写真撮影は矢羽田が行った。
5. 空中写真は熊本航空に委託し、その成果品を使用した。
6. 本書に掲載した遺物実測は矢羽田が行い、遺構・遺物の製図は矢羽田のほか、中川照美（文化財保護課調査補助員）の協力を得た。
7. 遺物の写真撮影は、長谷川正美氏（雅企画有限会社）の撮影による。
8. 挿図中の方位は全て磁北を示す。
9. 写真図版の遺物に付した数字番号は、全て挿図番号に対応する。
10. 出土遺物及び図面、写真類は日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
11. 本書の執筆・編集は矢羽田が行った。

目 次

I 調査に至る経過と組織	1
II 遺跡の立地と環境	2
III 調査の記録	
(1) 調査の概要	3
(2) 土層堆積状況	3
(3) 遺構と遺物	6
IV まとめ	9

挿 図 目 次

第1図 調査区位置図 (1/2500)	1
第2図 周辺遺跡分布図 (1/25000)	2
第3図 遺構配置図 (1/100)	3
第4図 東壁土層図 (1/40)	4
第5図 西壁土層図 (1/40)	5
第6図 サブトレンチ土層図 (1/40)	6
第7図 1・2号溝実測図 (1/40)	7
第8図 1・2号土坑実測図 (1/40)	8
第9図 出土遺物実測図 (1/3)	8

挿入写真目次

写真1 作業風景

図 版 目 次

図版1 上段 調査区遠景 (吹上台地を臨む)	
下段 調査区全景 (真上から)	
図版2 ① 1号溝 (西から)	
② 1号土坑 (西から)	
③ 遺物出土状況 (南から)	
④ 完掘状況 (北から)	
出土遺物	

表 目 次

第1表 出土土器観察表	9
-------------	---



日田市の位置

I 調査に至る経過と組織

平成17年8月4日付けで南宝珠開発田中正史氏より市教育委員会へ、日田市三本松新町751-9ほかでの分譲住宅造成工事に先立つ事前の照会文書が提出された。この開発予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地である日田糸里に該当し、これまで周辺では一丁田遺跡などの調査がなされていることから、その取り扱いについての協議が必要である旨の文書回答を行った。その後、10月25日には予備調査の依頼文書が提出され、これを受けて12月20日に試掘調査を実施したところ、溝や柱穴などが確認され、遺跡の所在が明らかとなった。

こうした結果をもとに、開発主と遺跡の取り扱いについて協議を重ねたところ、予定地の造成は盛土工法にて行われるものの、造成地内に上下水道配管施設を伴う位置指定道路が設置されることから、この箇所については遺跡の保存は困難であると判断した。そこで、平成18年2月に道路部分約140mの発掘調査を実施することとなり、開発主と1月26日には受託契約を取り交わし、2月1日から3月4日まで発掘調査を実施した。整理作業は5月1日から5月31日までの期間実施し、その後報告書作成を行った。なお、当初対象箇所は日田糸里遺跡としていたが、糸里遺跡とは性格が異なることから、本調査以降、澁ヶ本遺跡として取り扱うこととした。

調査に関する日誌は以下のとおりである。

- 2月2日 機械による表土除去作業を開始する。
- 2月3日 遺構検出及び遺構の掘り下げ作業を開始する。
- 2月5日 土層確認のためサブトレンチを設定する。
- 2月10日 遺構の掘り下げ作業が完了する。
- 2月28日 サブトレンチの掘り下げが完了する。
- 3月2日 空中写真撮影を実施する。
- 3月4日 機材を撤収して調査を終了する。

なお、調査組織は次のとおりである。

平成17・18年度

調査主体	日田市教育委員会
調査責任者	諫山康雄（日田市教育委員会教育長）
調査統括	後藤 清（同文化財保護課課長）
調査事務	高倉隆人（同文化財保護課課長補佐兼埋蔵文化財係長）、田中正勝（同専門員〔平成18年度〕）、伊藤京子（同専門員）、中村邦宏（同主事補）
調査担当	矢羽田幸宏（同主事補〔平成18年度～主事〕）
調査員	土居和幸（同副主幹〔平成17年度〕）、今田秀樹（同主任）、行時桂子（同主任）若杉竜太（同主任）渡邊隆行（同主任）
調査作業員	五反田静子、後藤美知夫、財津利枝、財津由太、筒井英治、原口勝利、平原知義
整理作業員	川原君子、聖川暢子、吉田千津子



調査風景



第1図 調査区位置図（1/2500）

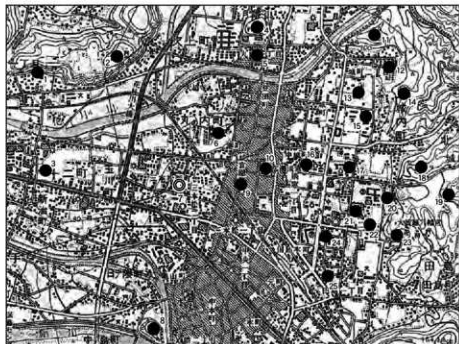
II 遺跡の立地と環境

瀬ヶ本遺跡は、日田盆地のほぼ中央にあたる標高約82mの沖積地に位置する。遺跡の北800m程には花月川が、南側1.1km程には三隈川が西へと流れており、遺跡はそれぞれの支流である城内川・中野川によって囲まれるような状況にある。現在遺跡の周辺は閑静な住宅街となっている。

周辺の遺跡を概観すると、北には弥生時代から古墳時代の集落跡である一丁田遺跡が、西には古墳時代・古代・中世の溝跡などが検出されている郷四郎遺跡が、北西の吹上台地上には、多彩な副葬品を持つ喪棺墓群や環濠集落が確認されている吹上遺跡と台地崖面に北友田横穴墓群が存在する。東には廣瀬淡谷が開いた私塾跡である史跡成宜園跡が、その北には江戸時代の商家の町並みを今に残す重要伝統的建造物群保存地区である豆田地区が、更に北には西国筋郡代であった永山布政所跡とその背後に丸山城が築かれた月隈山などが見られ、江戸期の景観を色濃く残す。さらに東には、南北に奔る大波羅丘陵上に、中世期に日田を支配した大藏氏の居城跡である大藏古城跡、中世の山城跡である堤城跡、古墳時代の石蓋土墳墓が発見されている赤迫遺跡、市内で唯一門簡埴輪が出土している薬師堂山古墳などが存在する。また、丘陵の裾部から沖積地にかけては、中世期の居館の一部と考えられる大溝のほか、古代の井戸跡や「門」・「林」などの墨書土器が発見されている慈眼山瀬戸口遺跡、中世の井戸などが確認されている上ノ馬場遺跡、「田」・「山」等の文字が書かれた墨書土器が出土している大波羅遺跡、古代から近世にかけての水田層が確認されている日田条里四反畑地区、弥生時代から古代の集落が確認されている日田条里飛矢地区、日田条里大原地区などが存在する。

《参考文献》

- 田中裕介編『慈眼山遺跡（A地区）大分県文化財調査報告第85輯 大分県教育委員会 1991
松下桂子編『郷四郎遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第10集 日田市教育委員会 1996
行時志郎編『上ノ馬場遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第23集 日田市教育委員会 2000
渡邊隆行ほか編『大波羅遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第29集 日田市教育委員会 2001
若杉竜太ほか編『日田条里飛矢地区』日田市埋蔵文化財調査報告書第40集 日田市教育委員会 2003
土居和幸編『日田条里四反畑地区』日田市埋蔵文化財調査報告書第46集 日田市教育委員会 2003
若杉竜太編『日田条里大原地区』日田市埋蔵文化財調査報告書第47集 日田市教育委員会 2004
渡邊隆行ほか編『一丁田遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第68集 日田市教育委員会 2006



第2図 周辺遺跡分布図(1/25000)

1. 北友田横穴墓群
2. 吹上遺跡
3. 郷四郎遺跡
4. 月隈横穴墓群、丸山城
5. 永山布政所跡
6. 一丁田遺跡
7. 瀬ヶ本遺跡
8. 日隈城跡
9. 史跡成宜園跡
10. 史跡廣瀬淡谷墓
11. 大藏古城跡
12. 慈眼山遺跡
13. 慈眼山瀬戸口遺跡
14. 丸山古墳
15. 上ノ馬場遺跡
16. 日田条里四反畑地区
17. 大波羅遺跡 4次
18. 堤城跡
19. 赤迫遺跡
20. 大波羅遺跡 1次
21. 大波羅遺跡 3次
22. 大波羅遺跡 2次
23. 薬師堂山古墳
24. 日田条里飛矢地区
25. 日田条里大原地区

III 調査の記録

(1) 調査の概要 (第3図)

今回の調査は試掘調査の結果を踏まえて、遺構検出面まで機械で掘り下げを行い、遺構の確認を行った。調査区は東西約5.5m、南北約25mの面積約140㎡の範囲で、標高約82.10mを測り、ほぼ平坦な地形であった。

調査において検出された遺構は溝3条、土坑2基、柱穴である。このうち溝について、調査後に地籍図との照合を行ったところ、2号溝が法定外公共有物であるいわゆる青線水路に該当することが明らかとなったため、2号溝を除外し、3号溝を2号溝へと変更した。

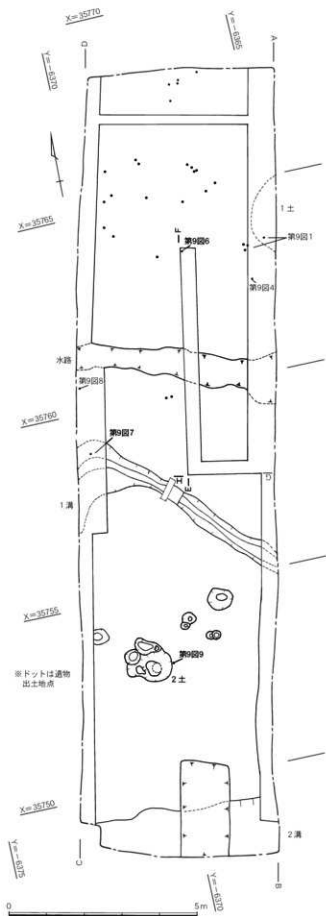
調査区の地山は黄褐色～黄橙色のしまりのない砂質土であるが、それを南北に挟む形で、黒褐色～暗灰色の粘質土が見られ、調査区の北側では遺物の集中が見られた。また、遺構埋土は浅黄色土(1号土坑)、灰褐色土(2号土坑)、黒褐色土(それ以外の遺構)の3種類が見られた。

(2) 土層堆積状況

今回の調査区は遺構が少なく、大部分が自然流路の堆積層にあたと判断されたため、調査区の東西壁面にサブトレンチを設定し、土層堆積状況の確認に努めた。調査が進むにつれ、当初の予想よりも複雑な堆積状況であることが確認され、東西のサブトレンチで確認された堆積状況の対応を把握することは困難を極めた。なお、遺構検出面は東壁7層、西壁8層の下面である。

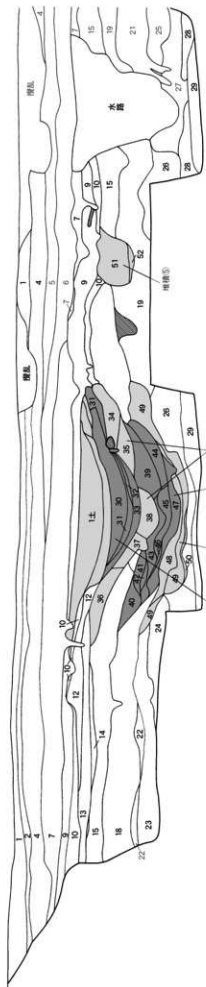
東壁 (第4図)

1～3層は水田耕作土であり、4・5層は水田基盤土層である。先述の通り、水路は明治初期には機能していたと考えられるため、水路を覆うように堆積する6層より上位の層は近代以降の層であり、水路が掘り込まれている7層も水路がその機能を失うまでは地表面として露出していた可能性が高い。7層より下位については、概ね水平に堆積しているが、部分的に水流の跡と考えられる状況が見られ、特に1号土坑の下では、4度の堆



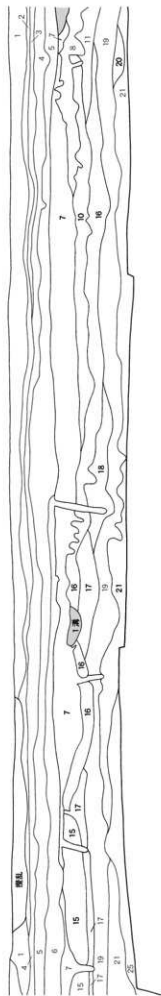
第3図 遺構配置図 (1/100)

A 83.00m



第4図 東陸士層図(1/40)

83.00m



- 増築地土
1 増築地土
2 灰土
3 灰土
4 灰土
5 黄砂土
6 黄砂土
7 黄砂土
8 黄砂土
9 黄砂土
10 黄砂土
11 黄砂土
12 黄砂土
13 黄砂土
14 黄砂土
15 黄砂土
16 黄砂土
17 黄砂土
18 黄砂土
19 黄砂土

- 水田耕作土
20 水田耕作土
21 水田耕作土
22 水田耕作土
23 水田耕作土
24 水田耕作土
25 水田耕作土
26 水田耕作土
27 水田耕作土
28 水田耕作土
29 水田耕作土
30 水田耕作土
31 水田耕作土
32 水田耕作土
33 水田耕作土
34 水田耕作土
35 水田耕作土
36 水田耕作土
37 水田耕作土
38 水田耕作土
39 水田耕作土
40 水田耕作土

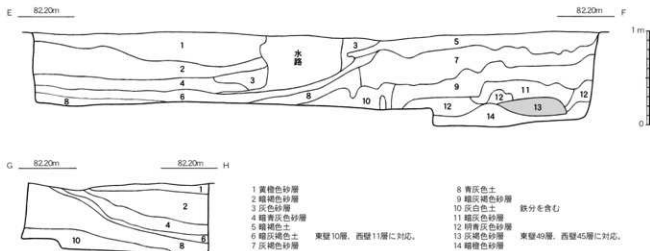
- 増築①
41 増築①
42 増築①
43 増築①
44 増築①
45 増築①
46 増築①
47 増築①
48 増築①
49 増築①
50 増築①
51 増築①

- 増築②
52 増築②
53 増築②
54 増築②
55 増築②
56 増築②
57 増築②
58 増築②
59 増築②
60 増築②
61 増築②
62 増築②
63 増築②
64 増築②
65 増築②
66 増築②
67 増築②
68 増築②
69 増築②
70 増築②
71 増築②
72 増築②
73 増築②
74 増築②
75 増築②
76 増築②
77 増築②
78 増築②
79 増築②
80 増築②
81 増築②
82 増築②
83 増築②
84 増築②
85 増築②
86 増築②
87 増築②
88 増築②
89 増築②
90 増築②
91 増築②
92 増築②
93 増築②
94 増築②
95 増築②
96 増築②
97 増築②
98 増築②
99 増築②
100 増築②

83.00m



83.00m



第6図 サブトレンチ土層図 (1/40)

積を看取できる。

西壁 (第5図)

水路とその上位の層については東壁と同じ状況である。水路北側の堆積⑤は44層が東壁の堆積④の48層、45層が東壁堆積④の49層に対応する。水路の南にはかなり規模の大きな堆積が見られる。堆積①・②の下部層である11層は東壁10層に対応し、これらの堆積のどちらかが東壁の堆積⑤と対応する可能性が考えられるが、規模や埋土の状況に差異が大きく断定は出来ない。その他の堆積について、東壁の堆積と対応する状況は確認されなかった。

サブトレンチ (第6図)

東壁の1号土坑周辺と西壁の水路南側の堆積について対応状況を確認するために設定したサブトレンチである。13層は東壁堆積④の49層と西壁堆積⑤の45層との対応している。

(3) 遺構と遺物

1号溝 (第7図、図版2)

調査区ほぼ中央で検出された南東から北西方向に伸びる溝である。調査区内での規模は約5.8m、幅はおおよそ50cmで、西側壁近くでは約240cmまで広がる。深さは20cm程度で、断面形はレンズ状を呈する。南東から北西へ向かって、わずかに傾斜している。

2号溝 (第7図)

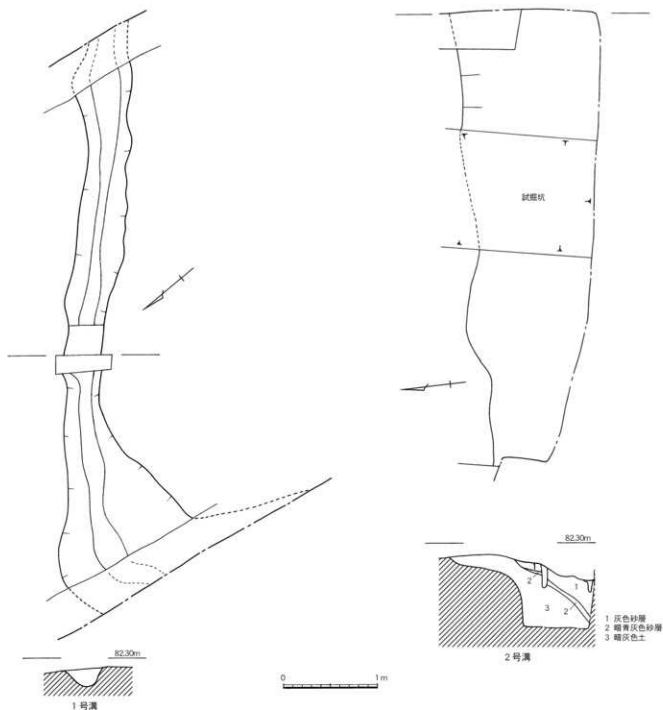
調査区の南側壁で検出された溝である。ほぼ東西方向に伸び、調査区内での規模は約4.8m、幅約1.4m、深さ約70cm \pm を測る。雨天後に調査区南側壁面が崩壊するなどの問題が起きたため、安全性を考慮し発掘を断念した。埋土の質や堆積状況などから自然流路である可能性が高い。

1号土坑 (第8図、図版2)

調査区北よりの東側壁際で検出された。規模は南北約276cm \pm 、東西約66cm \pm 、深さ約36cmを測る。平面は楕円形になると思われ、断面はレンズ状を呈する。橙色砂質の埋土中から土師器が出土しているが、これが土坑の周辺で出土した土師器と接合していることや、土坑の下に、自然流路と思われる数度の堆積が見られることなどから、土坑ではなく自然の流路が窪地である可能性が考えられる。

出土遺物 (第9図、図版2)

1は土師器甕である。口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。内面にはケズリが施される。



第7図 1・2号溝実測図 (1/40)

2号土坑 (第8図)

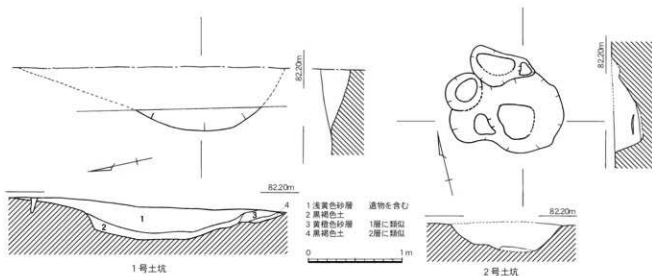
調査区南側で検出された土坑である。規模は南北約80cm+ α 、東西約1.2m、深さ約30cm+ α を測り、平面形はやや歪な楕円形で、断面はレンズ状を呈する。遺物の出土は見られなかった。

柱穴

調査区の中央部でいくつかの柱穴が見られた。埋土はいずれも黒褐色であった。柱穴からの出土遺物はない。

一括遺物 (第9図、図版2)

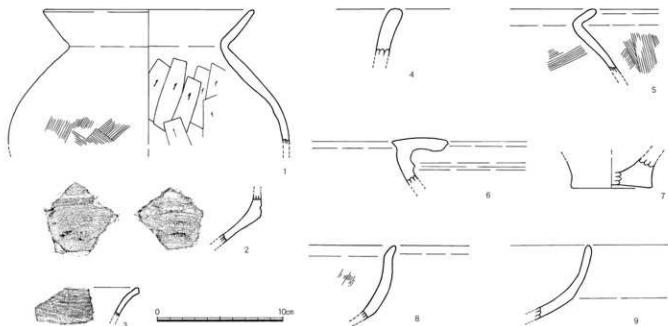
図示できなかったもののほかにも須恵器や白磁の小破片が廃土中より採集されている。調査区の北側で遺



第8図 1・2号土坑実測図 (1/40)

物の集中が見られ、調査区外のさらに北側に展開すると考えられる。

2は縄文土器である。後期後葉の三万田式と見られるもので、口縁部付近の屈曲部にあたる。沈線が1条廻る。3は縄文土器と思われる。内面にミガキが施される。西壁の25層から出土している。4は弥生土器の器台か。内外面ともナデによって仕上げられる。5は弥生土器の小形壺である。口縁はくの字状を呈し、内面には横方向のハケメ、外面には縦方向のハケメが施される。サブレンチの5層から出土している。6は弥生土器の甕である。鋤先状の口縁を呈し、外面にはミガキと丹塗りが施される。東壁10層から出土している。7は弥生土器の底部である。ややあげ底でわずかにくびれる。西壁44層から出土している。8は土師器の壺か。内面にうっすらとハケメの痕が残るが、外面の調整は磨滅のため不明瞭である。西壁の26層から出土している。9は土師器の壺である。外面の調整は、ナデとケズリによる。



第9図 出土遺物実測図 (1/3)

IV まとめ

今回の調査で確認された遺構は、溝2条・土坑2基・柱穴であるが、ほとんどの遺構で遺物が出土しておらず、時期の特定は困難である。唯一1号土坑で第9図1の土師器甕が出土しているが、本章で説明したとおり、この遺物が1号土坑に伴うものかについては疑問が残る。この甕は口縁部が若干内湾することなどから、布留系の古段階に位置付けられる。

今回の調査区は大部分が自然流路であったため、東西の壁面にトレンチを設定して土層堆積状況の把握に努めた。それぞれのトレンチで五つずつの流路と思いき堆積が確認されているが、これらについて明確に対応が確認できたものは東壁堆積④と西壁堆積⑤のみである。これらはサブトレンチでも確認でき、調査区を東西に横切っていた状況が窺える。その他の堆積については、東西のトレンチで類似する層は見られたものの、規模や堆積状況の差異が大きく、確実に対応すると言えるものはなかった。

トレンチからの出土遺物は第9図3・5～8がある。いずれも流れ込みによる可能性が高く、原位置を留めているとは考えにくい。第9図5の出土層であるサブトレンチ5層は遺物の時期が弥生時代後期前半と考えられることから、それ以降に形成された層であると言える。同様に、第9図6・7の出土層である東壁10層と西壁44層は、遺物の時期から弥生時代中期以降に形成されたと考えられる。第9図3・8は磨減が激しく、時期の特定は困難であるが、第9図8は器形などから土師器の埴として報告した。その場合、出土層である西壁24層は古墳時代以降に形成されたものとなり、遺構検出面まで土層が堆積し、安定した土地利用が行われるようになったのはさらにそれ以後と考えられるが、遺物の性格が明確にできない以上、結論を出すことは避けたい。

次に周辺遺跡との関係であるが、本遺跡の北東約400mに存在する一丁田遺跡(注1)では、弥生時代後期から古墳時代初頭に集中的に集落が営まれている。特に2号住居では本遺跡の1号土坑出土の土師器甕とほぼ同時期と考えられる甕のほか、二重口壺・広口壺・小形丸底壺・低脚杯・高杯・鉢などが出土しており、本遺跡と類似した立地条件や位置の近さから、両遺跡が密接な関係にあったことが窺える。また、同遺跡では吹上遺跡(注2)や小迫辻原遺跡(注3)といった台地上に存在する拠点集落と同時期の遺跡が台地縁辺だけでなく沖積微高地にも部分的に広がっていたことが指摘されているが、今回の調査もそれを裏付ける結果となったと言える。

今回の調査では、遺跡の性格に言及することは難しく、その詳細は不明であると言わざるを得ない。しかしながら、かつては遺跡自体存在しないとされ、未だ情報の少ない日田盆地の沖積地上で新たな遺跡が発見された意味は大きく、自然環境や土地利用を考えていく上で貴重な資料が得られた。今後、調査事例が増加するにつれ、本遺跡を含めた周辺一体の様相が解明されていくことに期待したい。

註

- 1) 渡邊隆行ほか『一丁田遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第68集 日田市教育委員会 2006
- 2) 土居和幸『吹上遺跡Ⅰ』日田市埋蔵文化財調査報告書第42集 日田市教育委員会 2003
下村 智『吹上遺跡Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第52集 日田市教育委員会 2004
土居和幸『吹上遺跡Ⅲ』日田市埋蔵文化財調査報告書第57集 日田市教育委員会 2005
- 3) 田中裕介『小迫辻原遺跡Ⅰ』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書10 大分県教育委員会 1999
土居和幸『小迫辻原遺跡Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第15集 日田市教育委員会 2000

第1表 出土土器観察表

発掘番号	遺物名	類別	品類	法 量			測 量		新 土	産 地	色 調		備 考	
				口径	胴径	底径	高さ	外径			内径	外面		内面
第9図-1	1基	土師器	甕	(16.6)	-	-	(11.6)	ナギ、ハケム	ケズリ	ABCDE	良好	灰白色	灰白色	
第9図-2	一鉢	縄文	鉢?	-	-	-	(1.7)	ミヤホ	ミヤホ	ABCE	良好	灰褐色	にじみ・褐色	
第9図-3	一鉢	縄文?	鉢?	-	-	-	(5.7)	不明	ミヤホ	ABCE	良好	灰褐色	にじみ・褐色	
第9図-4	一鉢	弥生	鉢付?	-	-	-	(5.8)	ナギ	ナギ	ABCEPH	良好	にじみ・褐色	にじみ・褐色	
第9図-5	一鉢	弥生	小形壺	-	-	-	(5.2)	ナギ、ハケム	ハケム	ABCE	良好	褐色	灰白色	
第9図-6	一鉢	弥生	壺	-	-	-	(3.7)	ミヤホ	ナギ	ABCE	良好	褐色褐色	灰白色	丹室系
第9図-7	一鉢	弥生	壺	-	-	-	(2.4)	ナギ、ハケム	ナギ	ABCDEPH	良好	褐色	灰白色	
第9図-8	一鉢	土師器?	埴?	-	-	-	0.4	不明	ナギ、ハケム	ABCE	良好	灰白色	黒褐色	
第9図-9	一鉢	土師器	甕	-	-	-	(5.8)	ナギ、ケズリ	不明	ABCEP	良好	褐色	褐色	

注記:単位はcm。1) 遺物は、発掘土層から出土した。2) 土師器は、縄文時代後期から弥生時代前期にかけての。3) 土師器は、縄文時代後期から弥生時代前期にかけての。



調査区遠景（吹上台地を臨む）



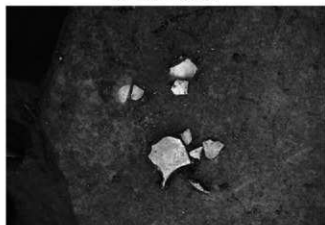
調査区全景（真上から）



① 1号溝 (西から)



② 1号土坑 (西から)



③ 遺物出土状況 (南から)



④ 完掘状況 (北から)



9-1



9-2



9-3



9-4



9-5



9-6



9-7



9-8

出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	たきがもといせき
書名	瀧ヶ本遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第80集
編著者名	矢羽田 幸宏
編集機関	日田市教育委員会文化財保護課
所在地	〒877-0077 日田市南友田町516-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市田島2-6-1
発行年月日	2007年3月30日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
瀧ヶ本遺跡	大分県日田市 大字十二町字瀧ヶ本 751-9ほか	44204-6	651259	33°19'21"	130°55'48"	20060201 5 20060304	140㎡	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
瀧ヶ本遺跡	包含層	縄文時代 弥生時代 古墳時代	溝2条、土坑2基、柱穴	縄文土器 弥生土器 土師質土器	

瀧ヶ本遺跡

日田市埋蔵文化財調査報告書第80集

2007年3月30日

編集 日田市教育委員会文化財保護課
〒877-0077 大分県日田市南友田町516-1

発行 日田市教育委員会
〒877-8601 大分県日田市田島2-6-1

印刷 尾花印刷有限公司
〒877-0026 大分県日田市田島本町8-8